MOON-3『WOLF MEET VAMPIRE』＜6＞

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＯＮ－３『ＷＯＬＦ　ＭＥＥＴ　ＶＡＭＰＩＲＥ』＜６＞

【Ｎコード】
Ｎ０８９１Ｍ

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】
ロケ地から東京に戻った秀を待っていたのは、同じオフィスの友人　貴史の死だった。そして、その影には『彼』の姿があった。

『ＷＯＬＦ　ＭＥＥＴ　ＶＡＭＰＩＲＥ』の第６話しです。
お楽しみください。

『WOLF　MEET　VAMPIRE』<6>（前書き）

様々な『事件』が秀を襲う。秀は『目覚め』を余儀なくされるのだろうか？
ほどんど作者のノリで書いている「MOONシリーズ」です。サイトUPは週1～2回かな？マイ・ペース型です。でもこのキャラたちには裏設定もビシバシあって、
書いてて楽しいノベルです。
・・・ってか、FIFAワールドカップ、オランダに負けちゃったね（＝＝）
でもまだ、デンマーク戦もあるしｖｖ
（どこが小説と関係がある前書きだ！！）

『WOLF　MEET　VAMPIRE』＜6＞

＜6＞

一時間も経たないうちに、秀は青山のオフィスに飛び込んでいた。
「！秀ーーー」
急を聞いて駆け付けた２０人のスタッフ全員の視線が、ドアの前に立つ彼に集中する。
「一体、どういうことだ？貴史が殺されたって。」
無表情にーーーしかし、彼らのざわめきを制するのに十分な程、低い声で彼は言った。
「いつのことだ、さやか。あいつとは、昨日の夜、電話で話したぞ。」
「その・・・後だと思うわ。」
さやかを囲む彼らの輪に、静かに加わる秀の雰囲気に圧倒されながら彼女は、「次のクライアントとの打ち合わせが９時から新宿であったのよ。あなたの代わりにそこへ行ったところまでは、私も彼から電話をもらったから判っているけどーーーその後は新宿警察署からの連絡で、彼が３丁目で変死体となって発見されたと知ったの。」
そこで一呼吸置き、思案し、「今朝の・・・５時よ。」
「警察の話では、最近あの地区に多発している、通り魔の仕業らしい・・・。」
カメラマンの信二は、幾度かその光景をフィルムに収めていた。その過去の被害者の無残な光景が、友人のものと脳裏でオーバー・ラップする。
「何でまた、貴史は３丁目なんかに行ったんだ？」
ロケでは照明を担当している元木が、目を細めて怪訝そうに言った。「クライアントとの打ち合わせは、確か、プリンス・ホテルの

ロビーだったろ？何の用事でそんな場違いの方向へ行ったんだ？」
「貴史の家は、荻窪だし・・・まっすぐ西新宿へ行けば、営団地下鉄だってすぐなのに。」
玲子は、さやかの隣で彼女を支える様にして立っていた。
「新宿3丁目から、地下鉄に乗ろうとした？」
年長の始が、口髭を揺らして呟く。
「馬鹿な。逆方向だ―――」
秀は首を振った。
それから、青い顔色のさやかに振り返り、出来る限りの優しい口調で、
「さやか。彼のスケジュールは？G・W明けからCM撮りが入っていたのは知ってるけど、それ以外貴史が何か関わっていたこととかないのか？」
「落ちつけよ、秀。」
5年越しの付き合いで一度も見たことがない、その秀の様子に、始は制するかのように彼の肩に手をかけた。
「落ち着いてるさ、始。ただ、気になるのは―――」
気になるのは―――『人』には説明のできない、秀のみが持つ『野生』の感だった。
仕事上でもプライベートにおいても、彼は幾度もその『感』に助けられてきた。
それが何だかは、自分自身にも解らない―――
ただ、今もその『感』が彼の体中で蠢いて仕方ないのだ。
『新宿』という言葉を、引き金にして・・・。
「・・・」
「さやか・・・？」
彼の問いかけに顔を背けるさやかへ、秀は再び尋ねる。「どんな些細なことでもいい。教えてくれ。」
「―――貴史は・・・」
さやかは、思い切ったように言った。「貴史は『和人』を追って

いたわ。」
「和人？」
秀は初めてその名を呟いた。「和人・・・・って。誰だ？そりゃ。」
「あなたが言っていた、『彼』の名よ。」
ふいに―――記憶の中に桜並木が甦る。
その下には、忘れるはずのないあの姿。
碧色の瞳と、少年の情景にも似た想い。
「じゃあ・・・貴史は、俺の代わりにその男を追っていたのか？」
「あなたが夢中だったから、彼に―――いいモデルになれば、と。だから、貴史もいろんなツテを通じて、やっと彼の名と3丁目のとある店によく現れるという情報を仕入れたのよ。だから昨日も、その店に行こうと思って。・・・きっとそれで・・・・。」
自分の頬を伝う涙を隠すかの様に、両手で顔を覆い、「でも、こんな事になるなんて―――！私、止めれば良かった！最近あの辺りで通り魔が多発していること、私、知っていたのに・・・！」
「さやかだけじゃない・・・誰だって知ってたさ、それは。――もちろん、貴史も。」
信二が呟く。
「・・・しかし、一体何者なんだ？その『和人』っていう奴は――」
直人は腕を組んで首を掲げた。「秀が目をつける程の奴だから、貴史だけでなく、俺たちだって追っていただろうが・・・」
「ちょっと、待って！」
つかの間訪れた彼らの静寂を、玲子の声が破った。「ねぇ、さやか。先刻警察が言ってたじゃない、同じこと！」
「え・・・」
さやかは気を取り直し、秀とすれ違いにオフィスを後にした、2人の警察官の問いかけを思い出そうとした。「・・・同じ事、言ってた。―――貴史が殺された現場に、騒ぎを聞き付けて集まってき

た近所の人たちと、まるで入れ違うかのように、一人の青年が立ち去って行ったって・・・。」

「そう、余程彼の姿が、その新宿警察署の人の記憶に残ったのか・・・貴史の知り合いかって尋ねに来たのよ。」

「妙に均整のとれた顔立ちと―――」

立会の場にいた、信二が後をつなぐ。「警察署の同僚には、笑い飛ばされたけど、その警察官は『彼は碧の瞳をしていた』って言い張っていた・・・。」

「あいつだ。」

秀は、確信を込めた声で言った。「あいつを一度見たら、忘れる訳がない。貴史は、確かにその『和人』に会ってたんだ。それから」

「それから―――」

さやかの、台詞。「誰が―――貴史を殺したの？」

夜は―――再び訪れていた。

『WOLF　MEET　VAMPIRE』<6>（後書き）

マイ・ペース型ですねー。ノベルもコバルト系入（かつての）ってますねー。
（書いててはずかしい（｜￥）。。。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0891m/

ＭＯＯＮ-３『WOLF MEET VAMPIRE』＜６＞

2010年12月13日20時10分発行